

Title	垂直統合と技術イノベーション
Sub Title	
Author	井上雅生(Inoue, Masayuki) 伏見多美雄
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1986
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1986年度経営学 第456号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001986-0456

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名 井上雅生 主査 伏見多美雄
(モービル石油株式会社) 副査 青井倫一
所属ゼミナール 矢作恒雄 研 矢作恒雄

垂直統合と技術イノベーション

本論文は「垂直統合が企業の技術革新を促進するか」という問題意識のもとに、全社レベルでの垂直統合度という組織構造そのものが、その中で行われるR & Dという組織行動にどのような影響を与えているかを、アウトプットであるR & D成果を測定することにより推定している。また同時に、R & D活動に影響するであろう企業特性として企業規模、マーケットシェア、キャッシュフローを、産業特性として市場集中度及び技術機会を考慮している。

定量分析のための代理変数として、垂直統合度には付加価値率、企業規模には売上高を、またR & D成果には特許数と研究開発費から求めた合成変量を利用している。尚、サンプルは製造業及び建設業から大手111社をランダムに抽出し、クロスセクションによる分析を行っている。

得られた結論として、全社的にみた川上垂直統合度を一つの経営指標と考えた場合、あるレベルまでは技術イノベーションを促進するが、それを越えた統合は逆に減少させる傾向があり、一方、企業規模とR & D成果の間には、規模の経済が働き出す閾値が存在するようである。また、技術機会が多く競争的な産業に属する企業ほど高いR & D成果を生むことも示されている。

但し、本研究の分析単位の大きさやサンプル数の限界等を考慮する時、現段階での結論はすべて作業仮説の新たな提案であると言わざるを得ない。